

(別紙様式3)

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名	学校法人 創価学園
代表者名	理事長 谷川 佳樹 印

令和2年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年 4月 16日 (契約締結日) ~ 令和3年 3月 31日

2 指定校名

学校名 創価高等学校
学校長名 塩田 誠一郎

3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

4 研究開発概要

- ・「自走」を課題とし、総合的な探究の時間に移行を開始した。1年生ではSGHの取り組みを継承する「世界市民探究(GCIS)」を実施、2、3年生は現行のSGHプログラムを実施した。
- ・フィールドワークはオンラインで国内・国外とも一部実施した。
- ・校内における課題であった「普及」は、報告会等をオンラインとリアル公開のハイブリッドで行い、オーディエンス、アンケート回収とも10倍以上に増えた。
- ・中間評価において指摘のあった「評価」はオンラインで測定できる業者に変更し継続した。
- ・「言語技術」は小中高キャンパス言語技術委員会が継続。今年度から、中学校で言語技術のワークブックを購入した。
- ・「世界市民探究」の一貫性を目指し、小中高キャンパス探究委員会を発足した。
- ・中間・最終報告会に関西創価高校も参加・発表し、コンソーシアムとしての基盤を作った。
- ・SGH終了後の発表はユネスコスクールとして行うことを目指し、ユネスコスクール・チャレンジ期間としても活動した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
I、SGH 報告会 運営指導委員会								○			○	
II、高大接続 ワーキング	○			○	○		○					
III、世界市民育成 ワーキング	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○			○

(2) 実績の説明

I、SGH報告会・運営指導委員会

①中間報告会 2020年11月21日13:30～15:00

オンライン（ZOOM）とリアルで実施

【対象】運営指導委員、関係者、地域学校、SGH校、保護者

【人数】オンライン参加者を含め138名が参加

【取組・支援】

- ・中間報告会で初めて兄弟校の関西創価高校も発表。（関西創価高は昨年度SGHを終了）成果としては、今後を見据えたコンソーシアムの一步を踏み出せた。
- ・ユネスコスクール・チャレンジ期間のASPUnivNet 支援大学である玉川大学教育学部の小林亮教授にも来校いただき、講評と今後の活動のアドバイスをいただいた。

②2020年度 第1回運営指導委員会

<運営指導委員>村上清（岩手大学学長特別補佐）、遠藤誠治（成蹊大学法学部教授）

<アドバイザー>小林亮（玉川大学教育学部教授）

管理機関とSGH委員教員が出席

- ・今回の発表内容について、達成度について
- ・探究科への移行についての指導
- ・今後継続（探究活動）していくテーマについて
- ・オンラインでの普及の効果と今後の公開について、大きな発展があった
従来は参加者10名程度→100名を超える参加
アンケートも10名程度→60名を超えるアンケート回収となった
関係者や保護者から、初めて参加できたとの声が多かった。今後の継続も検討した。
- ・ユネスコスクールへ活動を継続する場合の留意点。来年度からユネスコスクールになった場合の、現在の活動の継続の方向性や普及などについても協議した。

③最終報告会 2021年2月20日 13:30～15:00

オンライン（ZOOM）とリアルで実施

【対象】 運営指導委員、関係者、地域学校、SGH校、保護者

【人数】 オンライン参加者を含め120名が参加

【取組・支援】

- ・兄弟校の関西創価高校も継続して発表。前回はOGによる参加（SGH時代のものの発表）であったが、今回は現役生徒による継続して行っているSGHプログラムの発表を行うことができた。
- ・高大接続の観点から、創価大学の鈴木将史副学長に参加いただき、講評と今後の「総合的な探究の活動（GCIS）」の受け皿としての大学の準備について討議ができた。

④2020年度 第2回運営指導委員会

<運営指導委員> 村上清（岩手大学学長特別補佐）、遠藤誠治（成蹊大学法学部教授）

<アドバイザー> 佐藤悟（外務省参与・元ブラジル大使）、飯田順三（創価大学法学部教授）、鈴木将史（創価大学教育学部教授）

管理機関と教員のSGH委員が出席

- ・今回の発表内容について、達成度について
- ・5年間ずっと見て来て、毎年進化していたことが素晴らしいとの評価をいただいた
- ・評価についての課題、探究をいかに評価していくか大学でも課題。
- ・生徒による授業評価アンケート結果分析報告書（代々木ゼミナール教育総合研究所）の評価について分析
- ・SGHネットワーク校に申請。今後の活動について

II、高大接続ワーキング

<構成員>

- ・学園法人本部、創価大学、創価高校、関西創価高校の代表

<開催日> 4月21日（TV会議）、7月24日（TV会議）、8月7日（集中討議）、10月13日（TV会議）

<主な議案>

- ・SGUである創価大学の取り組みと、SGHの連携、JAPAN e-Portfolio の利用
- ・SGHの言語技術の授業教師の大学からの継続派遣、未来構想
- ・WWL申請も見据え、高大接続・東西接続のコンソーシアムの確立
- ・APの検討、他校の事例など検討
- ・現在行っている学校設定科目の大学教授による授業の更なる発展
- ・高校の「総合的な探究の時間」の大学への展開について、受け皿の検討

III、世界市民育成プロジェクトワーキング

<構成員>

- ・学園法人本部、創価大学、創価高校、関西創価高校の代表

<開催日> 4月21日、5月14日、5月28日、6月11日、7月2日、8月6日、9月3日、9月18日、10月9日、11月13日、12月18日、3月5日（すべてTV会議）

<主な議案>

- ② 1単位の授業に、国語科と英語科の教員がTTで着き、担任も担当できるようにした。
- ③ つくば言語教育研究センターの講習に、小中高の各教員が毎年参加するようにした。
- ④ 創価小学校、中学校、高校で「小中高キャンパス言語技術委員会」を開設し、情報を共有した。新カリキュラムからは高校では行わず、総合的な探究の時間に発展させて行う。
- ⑤ CWC（クリティカル・ライティング・センター）を放課後開設した。エッセイや論文指導にあたる教員を、創価大学より専門教員を紹介していただき人的資源も増強した。5年間を振り返り、生徒のプレゼン能力は格段に向上したのみならず、全教員でこの技術を共有することを努め、学校全体として論理的思考の基礎とすることができたといえる。

II GCP（グローバル・シチズンシップ・プロジェクト）

全校生徒対象のプログラムであるが、今年度はコロナ禍で一番打撃を受けた。生徒主導の運営を行うことで主体性も磨くことを目指してきたが、主導する「GCPリーダーズ」を募集することに苦慮した。今年度は登校できた日に実施できるものを集中して行った。また、GCPが主体となって展開していた実際の国内のフィールドワークは実施できなかった。（オンラインフィールドワークは別掲）

- ① 2020年5月22日～ オンラインで UNHCR WILL2LIVE（旧難民映画祭）を配信
在宅期間、生徒は全員、各自の端末で難民に関するドキュメンタリー映画を鑑賞することが可能とした。配信したのは「難民キャンプで暮らしてみたら」「アレッポ 最後の男たち」「それでも僕は帰る ～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～」など17のコンテンツで、SDGsの17のゴールが極力均等になるように揃えた。
- ② 2020年6月30日（火）、7月1日（水）第1回GCP企画（2、3年、1年GCIS企画）
上記、UNHCRのWILL2LIVE（旧難民映画祭）のドキュメンタリー映画の予告編のうち、「児童労働」「環境問題」「内戦」「異文化多様性」の4つの分野のものを鑑賞。生徒は1つの映画を選び、各自が予告編から予想した結末を持ち寄って班で話し合い、「私たちが期待する結末」を発表。単なる鑑賞にとどまらず、主体的に考え意識を高く持つよう工夫をして行った。
- ③ 2020年10月14日（水）第2回GCP企画（2年生）
フィリピン・レイテ島の地上戦の戦争証言を通して「戦争」の実像を知るという企画で実施。例年行っているものを実施した。
- ④ 2020年10月31日（土）第2回GCP企画（3年生）
模擬国連：「国連ランチ」を考える。担当国、グループ作業
国連ランチのメニューを考えるというディスカッションを行った。世界各国の食料事情、経済状況、宗教上の特色などを加味した上で世界の人々が喜んで食べられる「国連ランチ」を考案しようという企画で、この後数回の協議を続けた。
- ⑤ 2020年11月21日（土）第3回GCP企画（3年生）
模擬国連：第2回の国連ランチの討議継続 作戦会議・交渉
- ⑥ 2020年11月28日（土）第3回GCP企画（2年生）
現代紛争の実態と原因を探る
ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目をしながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考えた。

⑦ 2020年12月3日（木）第4回GCP企画（3年生）

模擬国連：第2回の国連ランチの継続 作戦会議・交渉・決議

⑧ 2021年1月23日（土）第4回GCP企画（2年生）

「世界人権宣言」を学ぶ

「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。

⑨ 2021年1月23日（土）第5回GCP企画（3年生）

オンライン・ファイナルプロジェクト配信開始

体育館で行っていたファイナルプロジェクトを生徒が自宅より映像を配信する形で実施。ポスターセッションを自撮り行ったものであるが、オンラインの特性でオーディエンスの分担もやりやすく、多くの感想が寄せられる「次世代型全生徒ポスターセッション」となった。

⑩ 2021年2月20日（土）第5回GCP企画（2年生）

人権ディベート 身近な人権・創立者の人権闘争を学ぶ

ディベートを通して身近な人権について考え、創立者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。

III、GLP（グローバル・リーダーズ・プログラム）

コロナ感染症により選抜型のプログラムも様々な点で大きく変更を余儀なくされた。はじめに選抜方法である。3年学校設定(2年目)は、12月に順調に実施されたが、2年生選抜の二次試験が緊急事態宣言と重なった。今後、オンラインでの実施が前提となることを踏まえ、1次試験通過者全員を選抜対象とした。その結果、当初の予定人数から大幅に増やし、28人(3年9人、2年19人)で6期目のGLPをスタートした。フィールドワークやリアルでの出前授業の開催等を前提としないで、オンラインフォーラムを開催することをゴールに設定した。

次に開始時期が大きく後ろにずれ込んだ。例年は3月末よりスタートするものを5月よりオンラインで開始した。以降オンラインベースで授業を展開した。GLPのフィールドワークは最も大きな変化を伴った。当初広島・長崎での実施を予定していたが、これを広島女学院とのオンラインピースフォーラムに変更した。また海外との意識調査を及びプレゼンテーションをウェブリオ株式会社の協力を受けて、カンボジアの高生とオンラインでの交流を行う、オンラインスタディーツアーに内容を変更した。また、これまでフィールドワークで行っていた大学研究機関の担当者の方による講演、被爆体験談などは、移動時間のないオンラインでの、各廃絶の専門家の方にインタビューを行うことができた。このオンラインを活用する試みは、来年度のGCISでの探究活動においても活用されている。

評価においてはgoogle slideやgoogle formを活用して、それぞれがポートフォリオを継続し、個人の作成及び進路の確信度の確認を行った。

一方「総合評価に客観性を持たせよ」とのご指摘を受け、資質能力を測定するAiGROWを一年生より先行して導入した。

その他、google Jamboardや、Padletの導入など、GLPの使命であるパイロットケースとしての取り組みを最後まで果たした。コロナのピンチを良き方向に導く手段、方便として新たな取り組みを導入できた。

SGH終了により、6年間の取り組みグループとしてのGLPそのものは終了となるが、今後2年生のGCISに於いて国際機関・NGO コースの各廃絶問題テーマグループに、その内容は継続されることとなっている。

IV、GCIS「世界市民探究：GCIS (Global Citizenship Inquiry Studies)」

SGHの活動のレガシーとして、SDGsをはじめとした地球規模課題を私事化するために、「私が世界をかえていく」をメイン・ビジョンに掲げ、3年間を通じてデザインされた探究学習を本年度1年生より年次進行で開始した。1・2年生は週1時間、「総合的な探究の時間」を利用する。

①総合的な探究のねらい

- ・アイデアや価値を創造し、課題を解決する力
- ・どんな困難な状況に対しても負けじ魂で乗り越えていく強靱な体力と精神力
- ・基本的な知識や、問う力、批判的・論理的思考力などの課題発見に必要な力
- ・適切な情報にアクセスし、取捨選択する力などのリサーチリテラシー
- ・プレゼンテーションなど、あらゆる形態の発表で相手にわかりやすく伝える発信力
- ・ポートフォリオ作成等による、自分自身を俯瞰して振り返る力

②各学年別の目標

- ・1学年…探究学習の手法を理解し、基本的な「課題発見力」「リサーチリテラシー」を身につける
- ・2学年…獲得した探究学習の手法を活用し、社会(専門家)と触れることでさらに深化させて、その内容に対して「アクション・プラン」を提案し、発表を行う。
- ・3学年…蓄積してきた知識や技能・思考力を客観的に認知する。大学(学士課程)で必要とされる資質・能力を身につける。最終的に、解決困難な地球規模課題であっても、自らの力で解決に導くとの誓いを仲間と共有する。

③本年度1年生の実績

1、探究プログラム1「あいまいな日本語探究」(前半期取組み：中間発表会で発表)

- ・探究入門編として設定。
- ・4～5人のグループで指定された「あいまいな日本語」を定量化し、再定義する。
- ・クラスの生徒にアンケートを実施し、一次資料として活用する。
- ・Google スライドにまとめて発表。
- ・中間発表を他クラス同一テーマのチーム間で行い、情報の交換を行う。

2、探究プログラム2「食品ロス探究」(後半期：最終報告会で発表)

- ・世界的な問題でありながら自分事として捉えられる課題を設定。
- ・社会へのアプローチを意識した「アクション・プラン」の作成を目標とする。
- ・文献調査・リサーチの方法を学び、論理的に考え、根拠を明確にすることを求めた。
- ・食品ロス探究の最終発表はポスター発表の予定であったが、オンライン授業期間が続き、オンラインでのポスター発表に切り替えて実施。
- ・フォームを使って相互評価をし、分野ごとの代表発表Gを決定。
- ・代表発表グループは公益財団法人日本フードバンク連盟理事の田中入馬氏が参加される中で発表を行い、講評もいただいた。このことは自分たちのアクション・プランが社会に繋がったことを意味するものとなった。

④GCIS公開発表会

- ・食品ロスの専門家で、公益財団法人日本フードバンク連盟理事の田中入馬氏とつなぎ、オンラインで最優秀評価であった4本の発表を見てもらい、講評をいただいた。この発想は田中氏を通して実用の検討がなされることになった。

V、フィールドワーク（オンライン）

①沖縄オンラインフィールドワーク

今年はオンラインで4日間にかけて実施。今回のフィールドワークは、ZOOMのビデオ通話システムを活用し、東京と沖縄をオンラインで結び行った。延べ人数は100人を超えた。

・企画1〈沖縄戦遺骨収集ボランティア〉

第1日目：11月7日（土） 沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松代表を講師にお迎えし実施。「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」とのテーマで、実際の遺骨収集活動の現場の様子や収集された遺骨などの画像を画面で共有しながら、そこから想像し垣間見ることができることを教えていただいた。その後、グループごとに分かれて意見交換を行い、各グループからの報告と具志堅代表への質疑応答が活発に行われた。

・企画2〈グローバルセミナー〉

第2日目：11月11日（水） 「グッジョブおきなわプロジェクト」の喜屋武裕江代表を講師にお迎えし、グローバルセミナーとして開催した。（グローバルセミナーで記載）

・企画3〈ひめゆり平和祈念資料館・那覇国際高等学校〉

第3日目：11月14日（土） ひめゆり平和祈念資料館説明員の仲田晃子氏を講師にお迎えし実施。この企画には交流を続けている沖縄県立那覇国際高等学校（SGH校）の生徒も参加。「戦争体験を伝えるかたち～ひめゆり平和祈念資料館の試み」と題して、元ひめゆり学徒の皆さんが高齢化する中、資料館のリニューアルに向けて積み重ねてきた取り組みや課題について教えていただいた。その後、グループごとに分かれて意見交換を行い、質疑応答を行った。

・企画4〈創立者池田先生と沖縄〉

第4日目：11月15日（日） 沖縄の創価学園顧問、安田進氏を講師にお迎えし実施。沖縄戦を次世代に継承していく地道な取り組みと課題について教えていただいた。

②広島オンラインフィールドワーク

毎年、SGHのGLPの教育事業の一環として行われてきた広島フィールドワークを、今年はオンラインで実施。今回のフィールドワークは、ZOOMのビデオ通話システムを活用し、東京と広島をオンラインで結び行った。

・企画：広島女学院高校一創価高校 平和フォーラム

- ・目的：核廃絶教育を通じて交流を行ってきた両校生徒の交流を深め、地球規模課題解決にむけた問題意識を高める

・交流日程：2020年11月14日（土） 13時過ぎ（90-120分程度）

・参加生徒：創価高校 GLP 28名（高校2、3年生）、広島女学院高校 30名

・内容：小グループセッション、創価高校生よりグループごとの研究発表、テーマ別ディスカッション、全体メインセッション、各グループの代表による報告

③クリティカル・イシューズ・フォーラム（CIF）

コロナ感染症のため、カリフォルニアでの実施が中断されている CIF が、本年度はオンラインで実施された。

- ・ 2020年10月24日(日) 専門家による講義に参加
講演者：ラブリー・ウマヤン女史（Bombshelltoe 創設者）
参加者：日・米・露の各参加校、創価高校からGLP生徒28名
- ・ 2021年1月下旬～ CIF オンライン講座を受講開始。CIF ファイナルプロジェクトの説明
2月6日（土）メンバーの選定、プロジェクト開始 Canvas への登録
2月9日（火）M I I S 大学院生によるオリエンテーション
3月8日（月）M I I S 大学院生による探究内容のメンターシップ開始
3月26日（金）（予定）「核廃絶への青年の貢献について」の紹介動画の作成
ファイナルプレゼンテーションのアップロード
4月18日（日）（予定）C I F 参加校によるオンラインミーティング
テーマ「国連改革と安全保障の理念の変容」

④海外オンラインフィールドワーク

カリフォルニア・フィールドワークに代わるものとして、ウェブリオ(株)と共同開発した「オンラインスタディーツアー」を活用した。事前学習・準備として、①何をテーマに議論するかを全体でディスカッション、②自分たちの趣味や身近なものについて写真で説明するプレゼンテーション作成、③核問題について説明するプレゼンテーション作成 を行った。

- ・ 2021年1月15日、29日、2月5日、12日（4回）すべて17時～18時
- ・ 参加者 GLP生28名（2年19名、3年9名）
- ・ 交流国(今回はカンボジア)と平和をテーマに両国の相違点・共通点を見つけ討議する。
1日目：写真や物をつかって自身の身近なものを紹介しあう
2日目：創価高校の生徒から核兵器に関するプレゼンテーション(核兵器の概要、歴史、現状、今後の展望)
3日目：前回の4テーマ(コロナウイルス、家族、SNS、学校)から一つ選び、「テーマ x 平和」について議論。議論した内容をプレゼンテーションにまとめる
4日目：コロナウイルス、家族、SNS、学校について、お互いの国の状況を共有
- ・ 2021年度以降のG C I S のフィールドワークまたは、高3研修旅行の先駆的事例として先駆的に実施。

VI、グローバルセミナー（オンライン）

- ・ 目的 国内外で活躍される有識者・学者・本校卒業生をお迎えし、講演会・懇談会を開催することによって、生徒がグローバル人材へと成長するための触発の機会とする。一貫校である創価中学校にも広く公開する。2020年度はコロナ禍のため、オンラインで4回行った。※2019年度は15回（9カ国15組）実施

- ①菖蒲川由郷氏（新潟／新潟大学大学院特任教授・厚生労働省のクラスター対策班）
〈開催日・会場〉2020年6月30日（火）

新潟大学と創価高校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉医学を志して走り続けた20年

〈概要〉全員登校が再開され、本年初のグローバルセミナーを全校生徒対象に開催。コロナ禍の中、菖蒲川教授は厚生労働省のクラスター対策班で活躍されており、公衆衛生学の専門的な話から、新潟と結んでコロナウイルスに関わる話をうかがった。

②エド・フィーゼル氏（アメリカ／アメリカ創価大学学長）

〈開催日・会場〉2020年10月31日（土）

カリフォルニアのアメリカ創価大学と創価高校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉アメリカ創価大学（SUA）における世界市民教育

〈概要〉世界市民について「知恵・勇気・慈悲」の3つの視点を中心に話を進められた。アメリカ創価大学では広い分野の横断的な教育や研究を通して、いかに世界市民を育成しているか、学問だけでなく一流の人格を養成するSUAの取り組みが紹介された。

③喜屋武裕江氏（沖縄／グッジョブおきなわプロジェクト代表）

〈開催日・会場〉2020年11月11日（水）・沖縄と参加者をオンラインで結び実施

〈テーマ〉2030年 輝く未来は自分で創ろう!!

〈概要〉沖縄フィールドワークの1つとして実施。沖縄県のおかれた現状や、今後の社会の変化を考察しつつ、一人ひとりのキャリア形成の上で大切なことは何かについて、沖縄と参加者個人を結んで実施。

④西沢俊広氏（筑波大学／NEC ドローンの運行管理システム開発（国家プロジェクト）リーダー）

〈開催日・会場〉2020年11月17日（火）・筑波と学校をオンラインで結び実施

〈テーマ〉ロボット・ドローンが活躍する安心・安全で効率的な社会の実現を目指して

〈概要〉ロボット・ドローンの研究開発を通し、ドローンが安心・安全に日本のそして世界の空を飛び交えるようにするための国家プロジェクトの責任者として、近未来の話をされた。研究開発だけでなく法制度設計や政策提言などの話もいただいた。

VII、オンライン英会話

SGH当初にGLPがウェブリオ(株)のオンライン英会話を先駆的に実施。現在は英語表現の時間で全校生徒対象のプログラムとして実施されている。SGHで行ったことのカリキュラム化の一つである。

X、タイムマネジメント指導

スコラ手帳(時間管理手帳)を活用し、一人ひとりの生徒が時間の使い方を見つめ価値的な時間の使い方を学ぶ、タイムマネジメント教育に取り組んでいる。SGHAより6年継続して行ってきた。臨時休校が続いた中でも、定期的にオンラインで提出する取り組みも実施。6月にはこの取り組みが注目され、「休校期間も生徒がセルフマネジメント」とのタイトルで朝日Edua他、インターネット上の多くのニュースサイトで紹介された。

7 5年間の研究開発を終えて

目標の進捗状況、成果、評価と次年度への改善点、SGH終了後の継続性について

以下の(1)～(8)の項目として報告を行う。

- (1) 教育課程の研究開発の状況について
- (2) 高大接続の状況について
- (3) 生徒の変化について
- (4) 生徒の資質向上測定・外部テスト AiGROW 受験結果
- (5) アンケートと分析
- (6) 教師の変容について
- (7) 学校における他の要素の変化について(授業、保護者)
- (8) その他の課題や問題点について

(1) 教育課程の研究開発の状況について

- ①スーパーグローバルハイスクール指定後、「言語科」を設け、「言語技術」の授業を1年生と2年生に1単位ずつ行った。また、これを英語科の教員とティームティーチングとして組むのみならず、担任も参加するカリキュラムとした。「日本語と英語の往還作業」の授業は本校独自のものであり、高校から始まった「言語技術」は中学校でも単位化され、本年度からは「つくば言語技術教育研究所」のテキストは中学校で購入して学ぶことになった。今年度は移行期であり、中学と高校で言語技術の授業は行われた。新年度カリキュラムから高校からはなくなる予定である。このように、小中学校に展開できたことは、SGHとして新たなことを取り組んだ成果であり、実験的に行ったものの有用性が証明されたものである。小学校の国語の授業にも取り入れられ、「小中高一貫」のカリキュラムとなった。当然ながら、これはSGH終了後も継続する。
- ②海外フィールドワークをウェブリオ(株)と共同開発をした「オンラインスタディーツアー」を活用した。ウェブリオ(株)とは、SGHの当初、創価高校と共同開発をした「オンライン英会話」時代より継続して、さまざまコンテンツを開発してきた。今回も、重ねての討議から、本校の探究活動に合う形で実施ができた。カンボジアの高校生との討議は、語学力の壁以上に問題の討議に至るまでのIT環境やスキルの差があった。先駆的に行ったものとして意味のあるものとなったが、全校生徒への展開に関しては、費用対効果を考えて今後の課題となった。
- ③選抜生徒によるGLPは、学校設定科目としてカリキュラム化した。現在3年生のみが対象となっている学校設定科目を、今後は2年生から「総合的な探究の時間」の選択コースとして実施する。新カリキュラムになっても残ることになった。
- ④本年度からポストSGHとして「総合的な探究の時間」を「世界市民探究(GCIS:Global Citizenship Inquiry Studies)」として1年生より1単位実施。その準備のため、2019年度より「探究科」を設置してきた。この探究科も言語科もすべてSGH委員で構成されており、SGH終了後も継続する。残念ながら、準備してきた教育コンテンツはコロナ禍のために半分しかできなかったが、オンライン授業で出来るものに変更し対応した。また、2年次から展開する探究活動の準備にあたった。さらに、本年度から「小中高キャンパス探究科会」が発足した。これもSGHとして先駆的に取り組んだ事例を小中に落とし込むことになり、探究活動も一貫性をもって行うことを目指す。

(2) 高大接続の状況について

- ① 高大接続について、スーパーグローバル大学グローバル化牽引型に採択されている創価大学と、定期的に「高大接続ワーキング」を実施。SGHの間は、毎回の公開授業・中間発表会・活動報告会に教授に参加をいただき助言をいただいていた。また、学校設定科目で、大学教授の派遣がオンラインとなり発展した。これは、オンライン授業では生徒の負担軽減のために、一日6コマのオンライン授業にならないように新たに時間割を作成した際に、学校設定科目は軽減して展開したものの、大学教授も大学自体がすべてオンラインで授業をおこなっていることから移行がスムーズであり、また生徒も身近に感じる利点があった。来年度もコロナ禍が収まっても、オンラインで行うものと期待され、より多くの教授の参加が期待されるものとなった。本年は、学校設定科目「平和学入門」でのみ実施となった。
- ② スーパーグローバルハイスクール指定後、本校卒業生が、大学でどのように活躍しているかを伺ってきた。SGH指定後は、言語技術の素養を持っていること、SDGsに対する問題意識の高さ、ディベートの素養、海外留学意欲の高さなどが格段に上がったことを報告として受けている。本年度は、本校がどのような探究活動を行っているのか、大学教授の方から積極的な視察があった。
- ③ 総合的な探究の授業で、年次進行の2年生で展開する「貧困・飢餓・教育・環境・水問題・経済格差」の問題についての高校生が大学へアプローチする懸案事項は、大学での受け入れ体制が確立した。
- ④ ユネスコスクールのASPUnivNET大学である創価大学、ユネスコスクールの玉川大学・小林教授よりご教示をいただき、SGH校の取組みを継続させるために、ユネスコスクール・チャレンジ校となった。本年は、12月6日のユネスコスクール全国大会に参加、12月12日には創価大学教職大学院が主催したユネスコスクール・オンラインフォーラムにて本校の事例を発表した。今後も大学を含め連携をとりながら、一般公開含めた情報の発信を続けていく。

(3) 生徒の変容について

- ① 学校全体がSDGsを常に意識するものとなった。特に、今回は学園祭を「オンライン学園祭」として実施したが、各クラスでSDGsをテーマに演劇を行い、映像として配信した。オーディエンスの圧倒的な増加や全生徒の参加など多くの利点があったが、SDGsを学んできたことによる問題意識の深さがあった。この時に、GLPが受けてきた映像配信の講義を全校生徒を対象にして放送室から実施した。映像専門家のこの講義は4回行った。GLPの先駆的な取り組みが生きた事例の一つと捉えている。
- ② 英検受検率のアップと合格者の増加。特にSGH指定前は、英検準1級は非常に高いレベルという認識であったが、今は手の届く目標として普通に捉えられている。今年度は、コロナ禍であるため受験生が減少したが、合格者は多く、合格率の高いものとなった。

英検の受験者数（合格者数）の推移

	SGHA	SGH 1年目	SGH 2年目	SGH 3年目	SGH 4年目	SGH 5年目	
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
準1級	67 (6)	127 (13)	204 (23)	272 (32)	258 (25)	251 (15)	106 (32)
1級	1 (0)	6 (1)	18(4)	16 (1)	15 (0)	3 (1)	7 (3)

③SGH指定後の本校卒業生は、ほぼ90%以上が留学をしている。これは主な進学先である創価大学がスーパーグローバルユニバーシティとして留学を勧めていることもあるが、海外大学進学が増加だけでなく、大学時における留学に対する意欲が非常に高まった。④一般に行われる発表会やフォーラムに積極的に参加することが多くなった。関東大会予選のサステナブルブランド国際会議はコロナ禍であったが、本年度も希望者が多数であった。

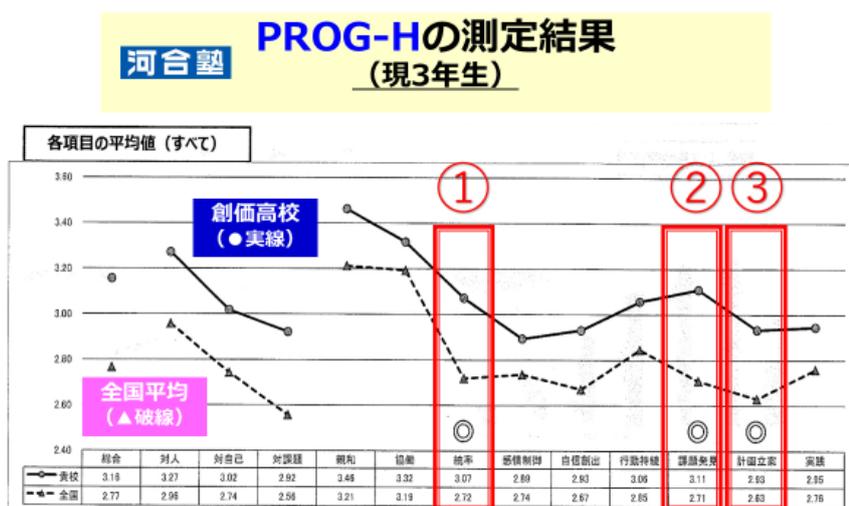
(4) 生徒の資質向上の測定・外部テスト AiGROW 受験結果 (参考・PROG-H グラフ)

<中間評価におけるコメント・・・事業評価の方法が生徒・教員へのアンケートや資格所持者数などに収束していたり、1年目と2年目がそれぞれ単発的な手法によって評価されていたりするため、今後は統計処理の専門家を擁する大学との連携を進め、評価の客観性を担保するなどの工夫や、とりわけ各学年のつながりについて再度見直し、事業評価を行うことが望まれる>

課題であった「生徒アンケートによらない生徒の資質・能力の変容の測定」のために、ジェネリックスキルを測るための PROG-H を高校2年生で2回実施して来たが、紙ベースでしか対応出来ないとのことで、コロナ禍のオンライン授業のため実施ができなかった。継続性が無くなったが、今後を見通してオンラインで可能な AiGROW に変えて実施。このテストはGLPの先駆的な取り組みで一度利用し確認済みであり、全生徒に展開したことになる。

結果として、本校は全国平均より1つの項目「自己効力」を除いて圧倒的に上であることが判明した。

特に全国平均を大きく上回っているのが、「創造性」「共感」「傾聴力」「寛容」「地球市民」「組織へのコミットメント」などである。なお、全国平均との差などの数値やグラフは AiGROW は公表の許可を得ていないので、同等の評価の出ている昨年度末の PROG-H のグラフを参考に掲載させていただいた。



①統率 ②課題発見 ③計画立案力

このグラフより、特に、①統率、②課題発見、③計画立案 において全国平均より大きく上回っていることがわかる。①統率は、生徒が主体的に運営できるよう生徒リーダー（GCPリーダーズ）を育ててきたことによると思われる。②課題発見力、③計画立案はSGHコンテンツの狙い通りと思われる。

逆に、AiGROWでもPROG-Hでも全国平均に近かったものは、「自己効力」であった。高い理想を掲げ、地球規模課題に挑戦することによって生じる逆転現象の「無力感」は以前も指摘されてきたが、これから展開していくGCISのビジョンとして「私が世界を変えていく」を掲げている。地球規模課題が自分の手ですぐに解決できることではないが、自分事と捉え、人生の目的として粘り強く戦っていける生徒を輩出していきたいと思う。これは、SGH後の今後の課題として捉えていく。

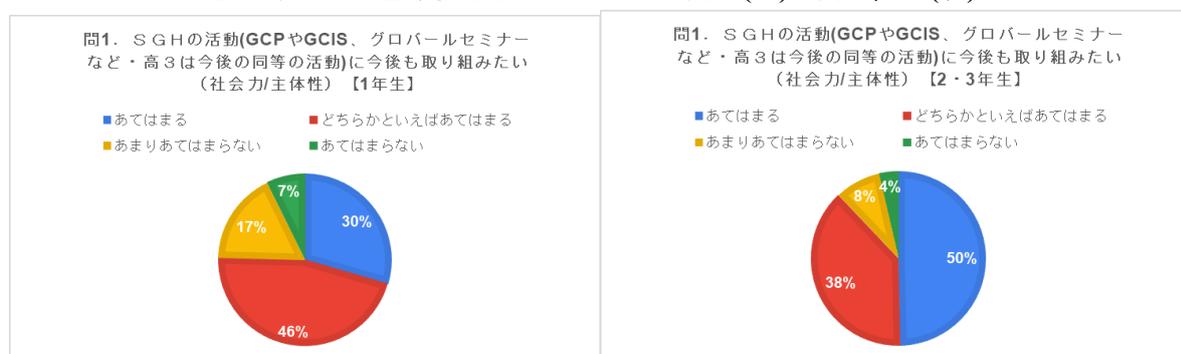
（5）生徒アンケートと分析

2021年3月、SGH活動に関するアンケートを全校対象に行った。今までは紙媒体であったものを端末のプラットフォームから入力出来るように変更した。しかし今年度は年度当初から在宅でスタートし、授業確保が最優先であったため年度当初のアンケートを取ることはできなかった。今年度、アンケートを取るにあたり、以下のことが予想された。

- ①オンライン授業がメインとなり、SGHに関する授業が主要教科に比べて後回しにならざるを得なかったため、グローバル課題に関する内容については、例年よりアンケート結果は悪くなる。
- ②同じアンケートをGCISプログラムを行った1年生と、SGHプログラムを行った2、3年生に実施した場合、1年生では学習の狙いがSGHのグローバル課題まで行きついていないため、2、3年生の方が高い。
- ③過去4年間と比べると、今年は特殊すぎるため比較対象とならない。
※過去4年間の比較グラフは、昨年記載済み

まずは、教育がいかに関心を持って生徒の意識を変えるかが明確となったいくつかのグラフを提示する。以下に示すものは、端的に上記②の教育効果の重要性を示したものと言える。

問1 SGHと同等の活動を今後も取り組みたい 高1(左)→高2, 3(右)

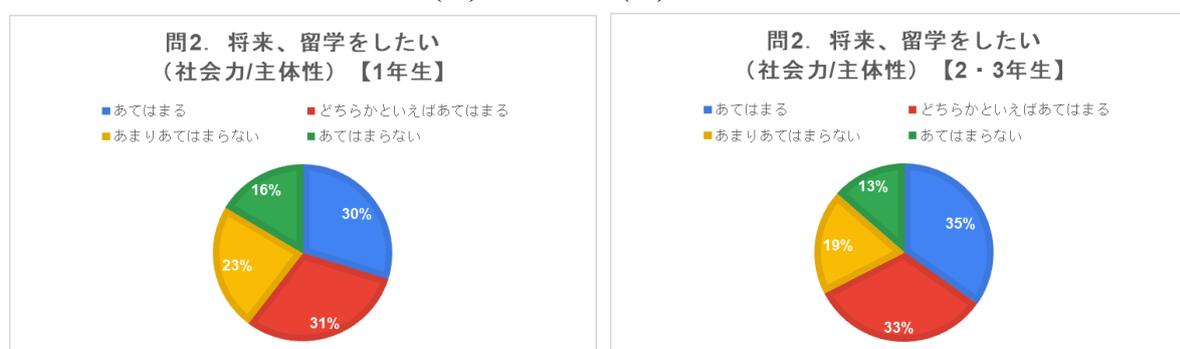


問5 地球規模課題に興味を持ち学んでいる 高1(左)→高2, 3(右)

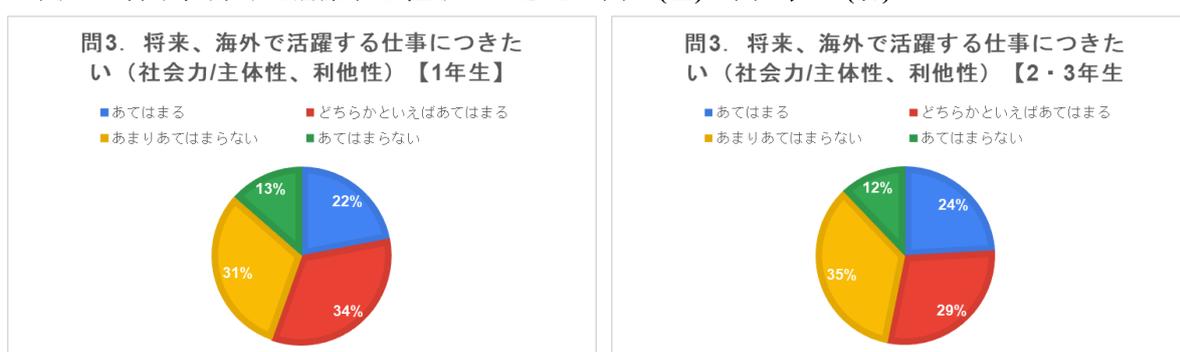


次に、上昇が微少のものを示す。これらは、潜在的にグローバルに働きたいという気持ちがあることを示していると思われる。SGHIアンケートでは、ずっと上げ止まりのものである。

問2 将来、留学したい 高1(左)→高2, 3(右)

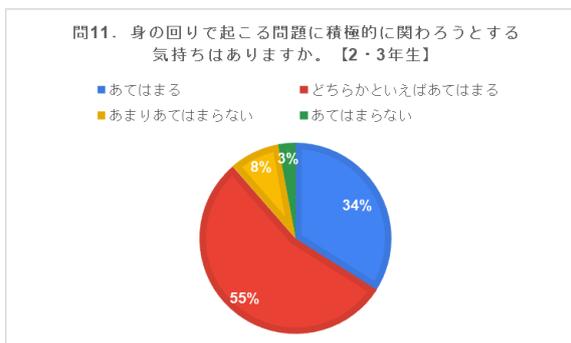


問3 将来、海外で活躍する仕事につきたい 高1(左)→高2, 3(右)



次は課題として見えた結果のグラフである。高1で身近な問題（食品ロス）を探究のテーマにしたため、高1で上がっていると思われたものであるが、上級生の方がやはり意識が高い結果となった。ただ、本年度は特に高1は取り組んだ時間が少なく、今後きちんとGCISプログラムを行えば、変化がみられると期待される。

問11 身の回りで起こる問題に積極的に関わる気持ち 高1(左)→高2, 3(右)



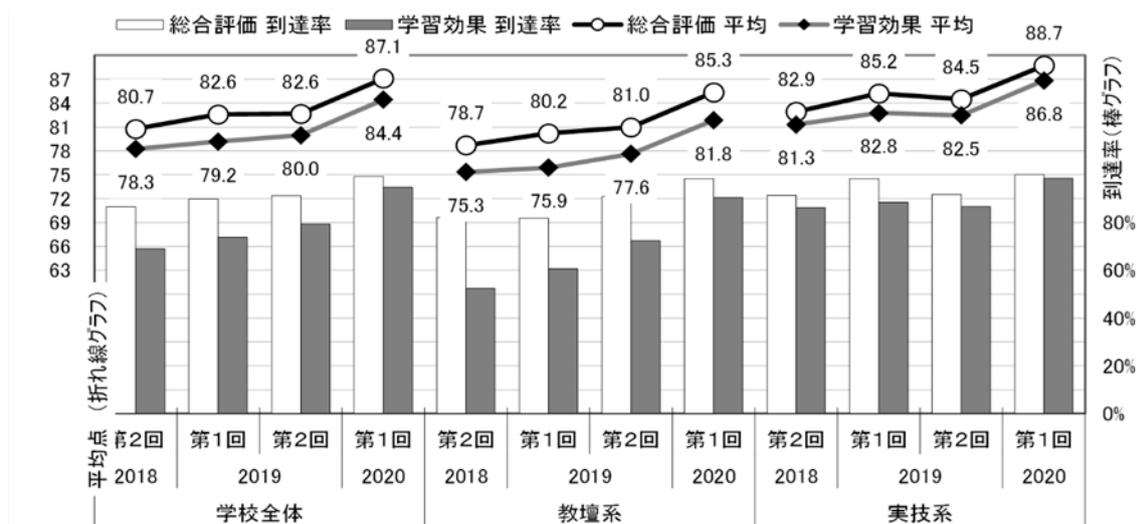
(6) 教師の変容について

- ①SGH以後、SGH委員会を希望者で運営しているが、専任教員51名中、25名がSGH委員として希望して運営に当たっている。学校全体として実施しているため、結果として全教員がSGHプログラムを実施し、SDGsに関する高い問題意識を持つようになっている。
- ②SGH指定前は、校内の一般公開は学園祭のみであった。SGH指定後より3年間は、中間報告会と活動報告会の2回を一般公開として追加し、4年目からは、学期2回、年6回の一般公開を追加した。本年度はオンライン公開であったが、これは全教職員に対して「開かれた学校」という感覚の変容と、一般公開される質の高さを求める姿勢の変容が見られた。
- ③言語技術の授業を小中高一貫で取り組むために、小中高それぞれの学校から、毎年2名前後の教員を、つくば言語技術教育研究所のセミナーに参加させている。本年もオンラインであったが新たに2名の教員がセミナーに参加した。小中学校とも陣容が整ってきている。
- ④SGH指定後、この5年間で「言語技術」は学校のスタンダードとなった。通常の授業の中で、例えばアクティブ・ラーニングの手法などの根幹になった。これはSGH前後の、非常に大きな変容であった。
- ⑤英検やTOEICに挑戦する教員が増えた。今年度はコロナ禍のため受検できていない。
- ⑥非常勤講師の授業の質のアップをどう行っていくか課題であったが、コロナ禍のオンライン授業を行う中で一気に解決した。出来ないでは済まされない状況と、皆で情報を共有し合い、支え合う中で、授業が大幅に見直され、改善された。

(7) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者）

①授業の評価 ～代ゼミの授業評価アンケートより

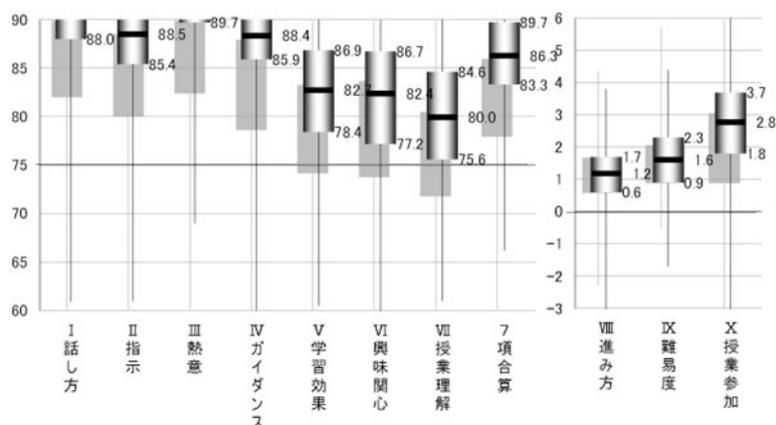
「代々木ゼミナール教育総合研究所」による「生徒による授業評価アンケート結果分析報告書」を継続して利用している。もともと非常に良いデータをいただいていたが、ここ3年間も非常に上昇している。測定した項目は、Ⅰ話し方、Ⅱ指示、Ⅲ熱意、Ⅳガイダンス、Ⅴ学習効果、Ⅵ興味関心、Ⅶ授業理解、Ⅷ進み方、Ⅸ難易度、Ⅹ授業参加 であるが、全項目で大幅のアップが見られた。グラフの黒の折れ線グラフは、「Ⅰ話し方～Ⅶ授業理解」の総合評価であり、灰色の折れ線グラフは「Ⅴ学習効果」を示している。75ポイントが代ゼミの目標値であるが、遥かに高い評価となっている。



また、下側の棒グラフは、その目標である75ポイントに達成している授業が学校でどれくらいの割合を占めているかを表している。棒グラフの目盛りは右の縦軸で、学校全体としては、総合評価（白い柱）はほぼ100%、学習効果を上げている授業（黒い柱）も95%に達している。代ゼミの分析者からは、「すでに80ポイントを超えている学校が、さらに4ポイント上乗せしたのは極めてまれなことです」と言われている。これらはSGH効果とも言えると分析している。

次のグラフは「四分位図」である。円筒が生徒の人数の50パーセントの塊を表しており、円筒の中の黒い太線が中央値となっている。影は一昨年12月の値で、全項目で大きく上昇してことがわかる。これはこの数年間ずっと上昇してきており、「Ⅲ熱意」は90を超えて、規定の表からはみ出ている。

学校課題別 四分位図(影は昨年12月の値)



「IVガイダンス」の上昇は「授業の目標や勉強のやり方について、先生は説明をしてくれる」という質問であり、この上昇からポイントを押さえた取り組みができていたことが読み取れる。また、代ゼミの分析では、「オンライン学習が肯定的に評価されている」とあり、

SGHを行いながらITをいかに利用するか、またその技術をいかに全教員の普遍的な力とできたかが示されたものと捉えている。

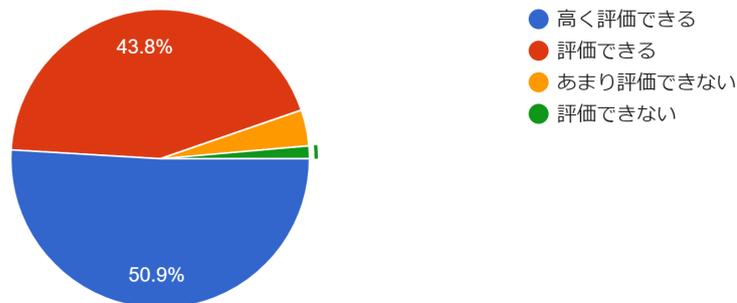
さらに、「X授業参加」の項目は一般的にはなかなか上がらないものと説明を受けているが、こちらも大きく上昇した。これについては、先生方が「アクティブ・ラーニングを中心にすえた授業を展開していることが推察される」と分析されていたが、SGHで始めた「言語技術」の授業が教員間に一般化し、対話による授業、一方通行ではない授業、いわゆる本当のアクティブ・ラーニングを教員が行っていると分析している。

②SGHの取り組みの評価 ～保護者アンケートより

次に、保護者アンケートの結果である。今年はコロナ禍のために思うような取り組みが出来なかったが、オンラインでも出来るものとして実施したものの評価となる。

④創価高校のSGHの取り組みを評価する

795件の回答



まずは回収率であるが、2018年度の保護者アンケート回収率は639件で61%、2019年度は944件で91%、本年度は795件で71%となった。この減少は在宅期間中の連絡がオンラインによって非常に頻繁になったため、保護者に煩雑感を与えたこともあると分析している。

この保護者のアンケートのうち、「SGHの取組みを評価する」は、よくあてはまる、あてはまるが、一昨年度93%、昨年度は92%、本年度は95%と、ほぼ上げ止まりの中でさらにアップして高い評価を得た。

(8) その他の課題や問題点について

①SGHが終了するにあたり、ユネスコスクール委員会を設立した。本格的にはユネスコスクールに認定されてから活動を開始するが、これはSGHの活動を継承し、特に対外的な部分を担当する分掌となっている。その後、文科省のSGHネットワークにも加盟申請をすることとなったが、校内での役割や対外的な教員の受け皿の設置、GCISとの関連性が翌年度からの課題である。

②来年度からのフィールドワークの実施が課題となっている。事前学習を行って現地に入るから観光ではなく実施できてきていた。この実施担当はSGHのうちGCP教員であった。来年度よりGCPは高3を除いて実施しない。高3のみ旧カリキュラムのSGHを実行する負担感も含め、紐づけされていたフィールドワークの実施が難しくなっている。特にコ

コロナ禍において先々が見えない中で、下見などに労力を割くことが困難である。また、オンラインで行ったとはいえ、フィールドワークはあくまで「現地性」がそのいのちであったはずである。その中で工夫したことは評価できるが、技術的な継続性は可能であるが、興味を生徒に持たせ続けることが今後もできるのかどうかは疑問である。

- ③GCISの方向性はSGHの反省点からきている。SGHで課題として出てきた表面的な達成感や深まりの少ない考察、それによる薄いプレゼンテーションを克服する目標がある。しかし、良かった点も失う可能性があり、カリキュラムマネジメントと共に課題である。
- ④評価の上げ止まりは、逆に課題である。より高みを目指すために、対外的なチャレンジも必要と思われる。
- ⑤「言語技術」と「世界市民探究」を小中高の創価学園の一貫性のある取り組みとして実施しているが、いかに有用性のあるものとして継続できるかは、今後の課題である。

【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	042-342-2611 (代)
氏名	山下 英一	FAX	042-342-2617
職名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp